君の魔法は希望を届け、僕の剣は希望を貫く

藤沢　涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の魔法は希望を届け、僕の剣は希望を貫く

【Ｎコード】
Ｎ０２９６Ｚ

【作者名】
藤沢　涼

【あらすじ】
「深く絶望したとき、あなたの願いを叶えてあげる。」
「時間を戻したい」と願い、カゲロウに４０年寿命をとられた契約者の少年、陽蝶。
「才能なんて無ければいいのに」と願い、アゲハ蝶に歌の才能を取られた歌手の少女、亜蝶。

願いの対価に、悪魔を討つ。

悪魔を討つための組織ＢＤＢに１０年所属している１６歳の陽蝶は、その日組織内で初めて同い年の少女に出会う。

彼女は引退報道で話題の実力派歌手、Ａｇｅｈａだった。

本名は亜蝶というらしい彼女は、アゲハ蝶との契約により歌えなくなり、対価を払うために組織にやってきたという。

彼女の能力は“歌”。

陽蝶の能力、“剣”と相性のいいパーティを組むとのことだ。

命が散る前に始まるはずの無かった陽蝶の青春が今、始まる。

プロローグ

蝶憑（ちょうつ）き、ポゼッションって知ってる？

―ごめん、知らない。

なんかね、渡せって言われたものをわたしたら願いを叶えてくれる
蝶がいるんだって。それにとりつかれた人を言うんだって。

―本当に？

うーん。わからない。都市伝説みたいなものかな？

―そうなんだ。

カゲルくんも気をつけた方がいいんじゃない？

―どうして？

だって、君の名前…

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「時雨（シグレ）！起きろ！」

頭に衝撃が走った。

何かでたたかれたのだろうか？

顔を上げると見知らぬ中年の男が立っていた。

「だれ…？」

「俺はお前の担任だ。」

「担任…？」

「そうだ」

「ってなんだっけ？」

またさっきと同じように頭に衝撃が走った。

そういえばさっきから小さな笑い声と奇異の眼差しが俺に向けられているような気がする。

なんだったかな…？

「あ、思い出した。ここ学校か。」

「はぁ…おい時雨（しぐれ）。顔洗うか、保健室行って寝るか、この問題に答えろ。」

担任は黒板を指して言った。

「保健室行って寝るのが一番ラクそうですね…と言いたいんですが保健室の場所はわからないし、顔洗おうにもタオルもってないんで問題に答えます…。」

小さな笑い声は大きな笑い声に変わった。

少しうるさいな…。

「お前、これ一応大学レベルの問題だぞ。高1に解けるか？」

担任が出題しておいて意地悪そうに俺を見てそう言う。

「12√3」

俺はボソッと答えだけ言って机に伏せた。

眠い…。

教室中がざわつく。

文句を言われないことから答えはあっていたんだと想像できる。

やっと眠れそうになったとき、チャイムが鳴った。

この学校はどうやら俺を寝かさない気らしい。

「じゃあ、数学はここまで。」

担任が逃げるように教室を出て行った。

それを見計らって何人ものクラスメイト達が俺のところに集まる。

「カゲルくん。すっごいね～」

「俺も思った。お前頭いいんだな。」

そんなことを数々言って次の授業のチャイムまで俺の席の周りを囲んで話していた。

休み時間すら寝かせてくれないのか…。

もう限界だ…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

俺はそのあと、何人もの先生の声を遠くで聞いてる感覚になり、気がついたら放課後の教室だった。

あーだりー。

無気力な学園生活。

本当は学校なんか通いたくないんだけど、通わなかったらあの人がうるさいから…

そのとき、廊下を何人かが通る音が聞こえた。

「えぇ！それやばいんじゃないの？蝶憑きって…」

「あの都市伝説のポゼッション？」

「うん。なんか、気づいたら蝶のあざが首にあって。」

歩いてきたのは派手な女子2人と髪をかきあげ、首を見せている控

えめそうな女子1人。

「生まれつきとかじゃないの？」

「それはないと思うんだけど…」

あった。

彼女の首には蝶のマーク、契約痕があった。

「それよりさ、今日ケーキ食べに行かない？」

「そうだね、京子は？」

京子と呼ばれたその子は髪を下ろして「行く」と答えて、足早に三人で遠くへ行ってしまった。

「京子ね…」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「おい～やまもと～ふざけんなよ。」

朝、教室に入ったら女子が教室の隅にかたまっていた。

「山本がぶつかったせいで、あたしのセーター汚れたんですけど～」

「あはは、何それウケルー。」

女子特有のいじめというやつだろう。

一人の金髪の女の子が花瓶の水をかぶせられていた。

「里香（りか）ちゃ〜んあやまりなよ〜」

「てか学校くんなし〜」

周りにいる派手な外見の女子の中に一人地味な女の子、京子もまざっていた。

「京子も何かやっちゃいなよ〜」

「う…うん。」

京子が動いて髪が揺れたとき、隙間から蝶のあざが見えた。

昨日より大きくなっている。

そろそろ限界かな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

放課後、俺は京子を呼び出した。

薄暗い教室。

みんな帰ったあとに。

「時雨くん、話ってなに？」

京子はビクビクしながら俺を見ている。
「首のアザ、どう？」
俺は彼女の首を指差し言った。
「アザ…。知ってたんだね。」
「昨日廊下で話してたのが聞こえた。」
「そっか…別に痛いとかじゃないし平気だよ。」
「…かは？」
「え？なーに？」
「対価（たいか）は何を渡したの？山本里香（やまもとりか）さん？」
彼女はひどく驚いた様子で俺の目を見た。
「なんで？」
「なにが？」
「なんで私が山本だってわかるの？」
取り乱す一歩手前の様な顔をしている。
「質問したのは俺。対価に何を渡したの？」

「…私。対価で渡したのは山本里香。」

「願いは？」

「もっと可愛くて頭よくっていじめられない子になりたい。」

「叶った？」

「ううん、私は私のまま、そうなりたかったの。だけど、私はみんなからみたら、京子なんだって」

彼女は自分を嘲笑うように微笑んだ。

「私は私に戻りたいよ。」

微笑んだ顔は崩れ、彼女は泣き出した。

「本当に戻りたいと願うなら叶えてあげてもいいよ。」

「え？」

顔を少し上げ彼女は俺を見た。

「あなたは？」

「俺は蝶憑き（ポゼッション）。」

「ポゼッション…？」

「ただいま対価を支払い中。君の願いをかなえて蝶は悪魔になった。

俺はそれを討つ。」

「何言ってるのかわからないよ…。」

「大丈夫。どうせ、すぐ忘れるんだから。」

「え？」

俺は両手を勢いよく合わせた。

『カゲロウ！顕現（ケンゲン）！』

手をゆっくり離し、現れた日本刀を右手で持つ。

「なに！！？」

彼女の首のアザに向かってすばやく振る。

「討伐。」

彼女の首の大きな蝶のアザは無数の小さな蝶になり飛んでいった。

「討伐完了」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「山本さん、一緒に科学室いかない？」

「うん。」

１週間前、私は教室で倒れているのを発見された。

そのとき同じクラスの田中京子さんも違う場所で倒れているのを発見されたらしい。

私も田中さんも何をしていたか覚えていなかった。

それから、なぜか私へのいじめはなくなり友人もできた。

少しは変われたのかな？

「あれ？」

「どうしたの山本さん。」

「今のって」

「ああ、カゲル君？」

「カゲルくん…？」

「や〜ね。同じクラスじゃない。時雨（しぐれ）陽蝶（かげる）くん。」

「そうよね、どうしたんだろ？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

—どうして？

だって君の名前、陽蝶（カゲル）って蝶が入っているじゃない。

アゲハチョウ

『大人気歌手Ａｇｅｈａ（１６）芸能界引退』

今日のテレビはどのチャンネルもその内容ばかりを放送していた。

土曜の朝のアニメをつぶしてまで放送するとは…。

Ａｇｅｈａ、奇跡の歌声と称されるほどの実力を持っていて、世間に疎い俺でも知っている歌手だ。

結構好きだったんだけどな…。

そのとき机の上の携帯が震えた。

着信だ。サブディスプレイには“黄蝶”の文字。

「はい、時雨（しぐれ）です。」

『カゲリ～ン、おっはよう。』

ブチッ。

無意識に電話を切ってしまった。

そしてまた携帯がなる。

「はい、時雨です。」

『ヒドイ！きらなくたっていいじゃない。』

「すいませんね黄蝶（きりか）さん。それより、もう歳なんですから相応の対応をしていただきたいなと」

『まだ２７よ！！！』

耳が痛い…。

「それで用件はなんですか？」

『あ～そうだった。時雨陽蝶（しぐれかげる）、召集命令がかかりました。至急ＢＤＢ本部まで来なさい。以上。』

それだけ言うと２７歳のオペレーターは電話を切った。

休日出勤かよ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

―ＢＤＢ

国家機関、対悪魔作戦本部。

深く絶望したとき、蝶に望みをかなえてもらい、対価として戦うことを強いられた蝶憑き、通称ポゼッションが集まる組織。

年齢層はさまざまだが、深く絶望することが少ない分、若い人間は少ない。

最年少記録は６歳。
最年長記録は８０歳とたくさんのポゼッションが集まっている。
一応給料ももらえる。

―契約蝶
深く絶望した人間の望みを叶えてくれる蝶。
そのかわり対価が必要。
大抵の場合、自分が持っていることすら忘れているものを対価として受け取っているので、蝶の存在には気づかない。
ただし、望みが大きすぎた場合、対価として悪魔の討伐を強いられる。
そのとき必要物資として、各契約蝶ごとに武器や能力などがわたされる。
契約蝶は複数の契約は結べない。
契約した人間がポゼッションの場合は死、小さな願いだった場合は対価を支払い終わることを条件に次の契約へといける。

―悪魔
望みをかなえてくれる蝶、通称契約蝶（けいやくちょう）を扮した偽者。

悪魔と契約をすると体のどこかに蝶のアザができる。
何者かが操っているとＢＤＢはみている。
大きいものと戦闘するときは結界が必要。

—蝶憑き
契約蝶に大きな望みを叶えてもらった人間。
何かしらの能力を授かっている。
悪魔を討つために生きている。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

「ここまでは大丈夫？」

俺がＢＤＢの第４班の部屋へ行くと、先ほど俺に電話してきた黄蝶（きりか）さんと、俺と同い年ぐらいの女の子がいた。
４班というのは俺が所属している班で班員は今のところ俺のみ。
俺だけのためにこの広い部屋に大きなソファーでかいテレビを置い

ていた。

その大きなソファーに黄蝶さんとその女の子が座って話をしている。

話の内容からして、俺がＢＤＢに入るときに受けた講座みたいなものだとわかった。

そのとき黄蝶さんが部屋に入ってきた俺に気づき、顔を上げた。

「遅かったね陽蝶（かげる）。もう講座はじめちゃってるよ。」

「これでもいそいできたんですけどね。で、そちらさんは？」

俺は後ろを向いて座っている女の子を指差して黄蝶さんに聞いた。

「え？陽蝶知らないの？超有名人ジャン。ほらアマネ、自己紹介。」

アマネと呼ばれたその子は俺の方へ振り向いた。

「Ａｇｅｈａ？」

その子の顔は見たことがあった。

いや、直接見たことは無い。

ただ、今日も見た。

テレビの中で…。

「なんだやっぱり知ってたか、そうＡｇｅｈａ。これからあんたの

班に入るから、ほら自己紹介って。」

Ａｇｅｈａは立ち上がり、俺に一礼すると口を開いた。

「歌代（うたしろ）亜蝶（あまね）。１６歳。」

澄んでいる綺麗な声だった。

「そういうことだから、あとはよろしくね。」

黄蝶さんはそう言って立ち上がった。

「ちょ…黄蝶さん？それだけ！？」

「うーん。助けてあげたいけど班違うしまあ、頑張って。」

行ってしまった。

～～

広い部屋に二人というのも気まずいものだ。

何か喋った方がいいよな。

「えっとアゲ…アマネさん？」

「名前。」

「？」

「私はあなたの名前知らない。」
表情を変えず亜蝶(あまね)さんは淡々と言った。
「あぁ、俺はカゲル。時雨陽蝶。」
「カゲル？」
「そう。」
会話が途切れた…。
気まずいよう…。
「亜蝶(アマネ)さんは…」
「アマネ。アマネでいい。」
呼び捨てにしてもいいと言っているのだろうか。
「アマネ？」
「何？」
「アマネは高校に行ってるの？」
大人に囲まれて生きてきた俺には、１０代ぽい会話というのがそれしか思いつかなかった。

「高校行ってない、月曜日から行けって。」

「誰が？」

「キリカ。」

ああ、ＢＤＢの命令か。

俺もなんだかんだでＢＤＢに言われたから高校に通っている。

就職しない俺たちにとって高卒資格なんて正直必要ないのだが、大人達は高校は楽しいから行っとけって勝手に決められた。

「どこの高校に行くの？」

「三日月（みかづき）高校。」

そりゃそうか。

ＢＤＢが決めたのに俺と違うところなわけ無いか。

「俺も三日月なんだ。」

「そう。」

本当に会話が続かない。

どうしようかと考えていたそのとき、警報が鳴った。

『緊急召集。緊急召集。４班、時雨陽蝶（しぐれかげる）、歌代亜蝶（うたしろあまね）。至急司令室ま

で来い。』

「召集だって…」

「聞こえてる。」

亜蝶はそう言うとソファーから立ち上がりドアの法へ歩いていったかと思うと、振り返り俺を見てきた。

「何？」

「場所、わからない。」

「じゃあ、一緒に行くか？」

「うん。」

『4班！緊急だって言ってるだろ。すぐ来い！』

放送がまた入った。

「いそごっか。」

「うん。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「でた。」

「はい？」

俺と亜蝶が司令室に行くと、司令官のおっさんが唐突にそう言った。

「だからでたんだよ！」

今度はキレ気味だ。

「何がですか？」

「悪魔だよ！」

「そうですか。」

「そうですか、じゃない！今回の任務は悪魔討伐。かなり強力なものだから結界は必ず張るように。以上。」

悪魔討伐か、大変そうだな。

「カゲル。聞いてたか？」

司令官は俺の方にかなりキレながら近づいてくる。

「聞いてましたけど？」

「聞いてたなら動け！ほら制服。」

俺は司令官にＢＤＢの制服を渡された。

「ほら、お前も。」

亜蝶も女子用の制服を渡された。

「え…？」

「ホラ！とっとと着替えて倒して来い！」

「は？」

「は？じゃない！被害が出る前に急げ！」

「ちょっと待ってください。悪魔討伐って誰がやるんですか？」

「バカかお前。４班に任務だって言ってるだろ。」

４班、つまり俺が悪魔を討伐？

めんどくさい…。

「じゃあ、行ってきます。亜蝶さんはテレビでも見ててていいから。」

ボコッ。

「いってー！！」

殴られた。親父にも…殴られたことはあるけど殴られた！

「何すんですか司令官！」

「歌代(うたしろ)も４班だろ！」

「そういえば…」

「ホラ、二人仲良く討伐して来い！」

「了解…。」

「歌代！返事！」

「了解？」

～～～

」

「だろ？」

～～～

～～～

「飛べます。」

「わかった。わからないことがあったら班長に聞くんだぞ。」

アマネが俺のほうをチラッとみたのがわかった。

「わかりました。」

「場所はオペレートさせる、行って来い！」

「「了解！」」

～～～

ＢＤＢのエレベーターは全部ガラス張りで外が良く見えるようになっている。

眺めが良くて俺は結構好きだ。

高所恐怖症の人には耐えられないらしいが。

外を見ていると、ガラスに映ったアマネが目に入った。

震えている？

「アマネ？」

「何？」

「もしかして高所恐怖症？」

「高いところスキ。」

「じゃあ、何か不安？」

アマネは図星だったのだろうか、それが少し顔に出た。

「な…なんで？」

「震えてる。」

俺はアマネの足を指差していった。

「…ちょっと怖い。」

―『お前怖くないの？』

―『何で？』

あの時、アマネは怖くないとは言っていなかった。

そりゃ、いきなり悪魔が～とか言われたら誰でもびびるよな。

「大丈夫。」

「え？」

「大丈夫だよ、きっと。」

そのとき、俺は始めてみた。

「そうね」

アマネが笑っているところを。

テレビでもまったく見たことが無いアマネの笑顔。

エレベーターが屋上に到着した。

「行こう。」

俺はアマネに手を伸ばした。

アマネはその手をぎゅっとつかんだ。

「うん。」

～～～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0296z/

君の魔法は希望を届け、僕の剣は希望を貫く

2011年12月1日15時50分発行